ジャマイカ便り 第10号8月

2024年度 青年海外協力隊 馬渕 萌子 青少年活動

ワグワーン！（調子はどう？） 岐阜県のみなさん、こんにちは。JICA 青年海外協力隊 2024年度１次隊、青少年活動で中南米のジャマイカに派遣中の馬渕萌子（まぶち もえこ）です。

今月に入り、「いってらっしゃい」と家族や友人に日本で見送られてから、ジャマイカに来て１ 年が経ちました。任期も折り返し地点を迎えています。これまで大きなケガや病気もなく、安全に元気に生活できていることに、心から感謝しています。この１ 年間を振り返ると、時期によって果物や野菜の種類が変わることや、ハリケーンシーズンや雨季のこと、停電や断水時の過ごし方など、さまざまなことを学びました。２ 年目となるこれからは、こうした経験を活かして、より充実した生活が送れたらいいなと思っています。さて、今回は第 10 号、ジャマイカでの１年間の生活をざっくり振り返りたいと思います！

８月～10月

日本からジャマイカまでは、アメリカで２回乗り継ぎ、約２日間かけてようやく着任しました。着任当初はハリケーンが通過した直後だったこともあり、物価の高さにただただ驚くばかり。首都では治安上の理由から徒歩は禁止され、すべてタクシー移動、ほとんどの時間をJICAドミトリー内で同期と映画やドラマを観て過ごしました。最初の１ヶ月は、オリエンテーションや語学研修、日本大使館、配属先への訪問などが続き、「ジャマイカに来た」という実感はあまりないまま、淡々と日々が過ぎていきました。

任地に赴任した当初、首都からはバスで約３時間、同期の住む街までも車で 40 分という距離にありながら、日本人は誰もおらず、情報もまったくありませんでした。ほどなくして停電や断水も経験し、そのときに支えてくれた大家さんのご家族には今でも感謝しています。日本では「なんとかなるだろう」をモットーに生きてきましたが、こちらではあまりに知らないことが多く、自分ひとりでは「なんとかならない」状況に直面しました。不安が一気に押し寄せてきたのも、その時期でした。

11 月～1 月

活動が本格的に始まり、配属先の生徒たちはパトワ語を話していたため、意思疎通がうまくできず、落ち込む日々が続きました。自分の伝えたいことが伝えられない、言語の壁の大きさを痛感しました。隣町に住む同期隊員と悩みごとを共有しているうちに、気づけば休日がそれだけで終わってしまうこともありました。まずは「自分にできること」を探し、環境を知ること、そしてその環境に慣れることから始めることにしました。

2 月～4 月

少しずつ近所の人々や職場の同僚たちとの付き合い方に慣れ、頼れる存在も増えてきました。朝、近所の人が挨拶してくれるだけで、この街に溶け込めているような気がして、とても嬉しく感じました。日本での生活では気づけなかった、目の前の小さな幸せを感じられるようにもなりました。また、タクシーの乗り方や地形を理解し始めたことで、休日には離れた街に住む隊員たちと集まり、遊びに出かける機会も増えました。「できないこと」にばかり目を向けるのではなく、「今、自分にできること」を考えて行動するようになりました。

5 月～7 月

ジャマイカでの生活に慣れ、ジャマイカの人々との関わり方も少しずつ分かってきました。しかし、まだ知らないことは多く、「慣れたようで、やはり慣れていない」というのが正直なところです。その一方で、先輩隊員や JICA 職員の方々が帰国し、新たな後輩隊員たちがジャマイカにやって来るなかで、時の流れを強く感じるようになりました。「自分はこのジャマイカで、どんな活動ができているのだろうか」と焦る気持ちを抱えることもあります。
けれども、ジャマイカの人々の温かさに触れる日々が増えるにつれ、文化を知ることや、日々のちょっとした出来事に目を向けること、そのすべてが JICA 隊員としての活動の一部なのだと実感するようになりました。

帰国された先輩隊員の方々からは、「残りの 1 年はあっという間に感じるよ」と言われています。来年の今頃、自分が日本で生活していることを想像すると、今の 1 日 1 日が本当に貴重なのだと実感します。次回は、私の大好きなジャマイカの果物についてご紹介します。それでは、リックルモア！（またね！）